

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第19回

福岡表警聞懐旧談 (一一)

明治十年三月二十八日未明、福岡土族はついに決起しました。小隊長村上彦十率いる隊は紅葉八幡宮を出て、西新町副戸長の役場から二百円を奪い、藤崎の監獄分場から秋月の乱で下獄していた国事犯らを救出しました。

かねて約束の大休山へと向かったのですが、その途中、六本松近辺の民家が放火されました。軍令第三条には民家への放火を禁じていたので、この出来事は「福岡の変」での汚点となりました。

また、早良郡の土族は大隊長越知彦四郎、小隊長加藤堅武、半隊長船越間道らに率いられ、その一隊は七隈の第十四大区調所を襲って米倉を確保しました。大区調所というのは郡役所のこと、当時、早良郡を第十四大区と呼んでいたのです。別の一隊は福岡城へと向かいました。

一方、大隊長武部小四郎は住吉神社に集まる一隊を指揮することになっていましたが、集合する者が少なく、不思議なことに武部みずからも出てきませんでした。ここには武部の置かれた事情が考えられねばならないでしょう。武部はそもそも時期尚早論を唱えて、早期決起を主張する越知と対立してきた経緯があったからです。

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談 上

清漣野生編述

第六回 (続き)

福岡城の南西隅、現在の福岡市美術館方面に、堀を渡る橋が架けられていて、橋を渡ったところにあったのが追廻門です。門を過ぎると、三ノ丸から二ノ丸へと上る坂道で、桐木坂と言います。ここで待ちかまえていた鎮台兵の攻撃を受け、福岡土族から多くの死傷者が出ました。撤退することになって、

依りて小隊長村上(彦十)は発兵を令し、一累を引率して直ちに西新町副戸長を襲ひしに、宿直者は狼

狽顛蹶、遁逃す。依て金庫を打毀つて金子を奪ふ。但し金員は碇(駈)と知らざりしも、大約二百円斗りも取めたりとて、村上が捕られ糾鞠の口供書に於て知られけり。それより警察分署を襲撃せしも、署内は□として人影だもなし。察するに巡査等は地方へ出張、宿直は已に遁逃せしこと知らる。依りて空敷其前を通り過ぎ、それより一列隊は宇藤崎千眼寺の側なる監獄分場に乱入す。

常直監守の野勝也は皆て同盟せしことなれば、一列を迎へ、鍵もて懲役場の扉を開き、入場せし国事犯の囚人、即ち秋月旧土族五六名混入せしを脱檻せしめ、味方の一列に加徒なし、的野勝也はそれを引率して一列に加はる。

追々諸方より参集せし人数は約八十余名に及ぶ。大隊長越知彦四郎、大隊副官久光忍太郎、下参謀船越間(聞)道、使番八木和一等も来会しつ、加藤堅武へ小隊長、船越間道は半隊長として集合の人数を二手に分ちて発陳進軍す。

時に天將に曙けんすとす。それより成列して今川橋を渡り、鳥飼通り、大土手に出て追廻を経て、城南大休山に向ひ進行す。

却説に隊長の一員たる加藤堅武は、越知・久光等と協合し曾て鞍手郡小竹近傍の石炭採掘(掘)事業に従事しつ、ありけるが、過る三月五日比出福なして越知・武部等に面接。その義拳に賛同して、既に同十九日寺塚なる穴観音の密集にも参加し、其場に於て小隊長にも推され、爾后義弟大三

郎が方に止宿せしが、同廿七日早良郡脇山村居住なる旧附属柴田延二来りて、拳兵切迫せしことを告げ、自分知友原村大神五百枝が居宅へ同伴す可しと云ふにぞ。堅武は即ち之に応じ、義弟大三郎をも誘ひ、刀槍及小銃併に弾薬を風呂敷に包み、延二同伴して原村に到りし頃は午後四時過ぎなりけり。直ちに大神五百枝が居宅に至れば、その門前には最寄の同志者十四五名も打集ひ、冷酒を酌んで出陣(陣)の首途をなしつ、あり。

堅武兄弟・延二は迎へられて一累と共にその出陣式を済せ、隣村免村の宮森に於て地方の兵を揃い、以て出陣の準備を整へしとの事なりしかば、其場の集合連と共に集合場に到りしに、即ち免村の入口なる宮森に幕打廻らし、原村の大野卯太郎、七隈の船越平九郎、吉安謙吾を始め、已に來りてその準備を整へ、

折から漸く武部は二三の同志に伴はれて其場に來る。舌間謂つて曰く。事勿(勿)卒に出て偏(遍)く同志に報せんとは思ひしも、奈何せん、警吏が取締厳密にして意の如くならず。僅かに十四五名斗り来集せりと報ず。武部は之を見て詰歎すらく。是れ命なり。奈何せん(と叫)び、一方屏居黙して語なし。



「免」の地は今、加茂と呼ばれる。「免の里」の碑(進藤一馬先生書)が、かつての地名を伝える



多くの死傷者を出した福岡城の桐木坂

就中七隈土族嚮導斥候の一人なる船越平九郎は桐木坂の下に於て重瘡を負ひ其場に斃る。

語り台兵の防禦堅固にして敢て近附く可きにあらねば、越知大隊長は退却を命じ、余兵を集合して城南大休山へ引上ること、はなりたり。その沿路なる即ち追廻内馬場・厩後・蓮池・馬場頭所在の人家は片端より放火焼払ひて、徐々として大休山の絶頂指して攀ち登りけり。

第七回

○東方面の一累軍機を失して進發抵悟す

折から漸く武部は二三の同志に伴はれて其場に來る。舌間謂つて曰く。事勿(勿)卒に出て偏(遍)く同志に報せんとは思ひしも、奈何せん、警吏が取締厳密にして意の如くならず。僅かに十四五名斗り来集せりと報ず。武部は之を見て詰歎すらく。是れ命なり。奈何せん(と叫)び、一方屏居黙して語なし。